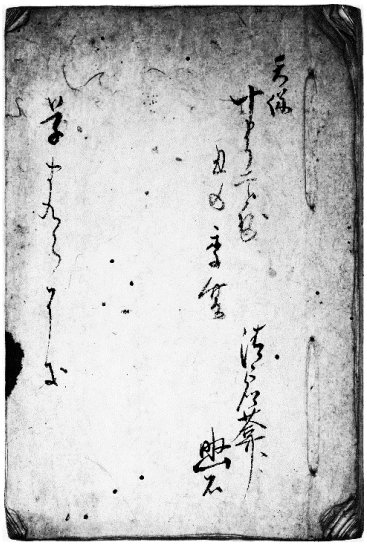
江戸時代の旅―粒浦の小川真澄、城崎へ行く

岡山大学文明動態学研究所客員研究員
室 山 京 子

はじめに

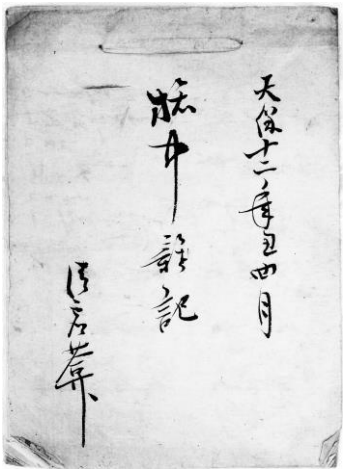
- 本日のお話し：江戸時代後期の旅日記「草まくらにき」から旅の様子を紹介。特に但馬国湯島（城崎温泉、現兵庫県豊岡市）との往復の道中での出会いを取り上げる。
- 使用する史料：
  ①天保 12 年（1841）「草まくらにき」（倉敷市歴史資料整備室所蔵小川家文書 3-19）。但馬国城崎郡湯島村の城崎温泉への旅日記。**【図版 1】**
  ②同年「旅中雑記」（倉敷市歴史資料整備室所蔵小川家文書 3-16）。旅先での支出を記録。**【図版 2】**
- 旅人：備前国児島郡粒江村粒浦（現倉敷市粒浦）の歌人・小川真澄。上記①②の筆者。
- 本講座では湯島は「城崎」と統一。旧暦・数え年使用。



図版１　「草まくらにき」表紙
「天保十まり二とせ丑の季夏　清虚庵幽石　草まくらにき」と記される。

参考　江戸時代と旅

- ❖ 街道や海路の整備→宿場や港も整備。安全性が向上。
- ❖ 庶民の旅は、社寺参詣であれば許されることが多い。参詣にかこつけて名所巡りなどをする。
- ❖ 幕府や藩など領主は他出を規制。→岡山藩の法令「金毘羅参りは１村に１人、村役人（名主）の寺社参詣・湯治は農繁期以外にせよ」など。
- ❖ 往来手形を発行してもらい携行＝正規の手続き。身分証明。病気などトラブル時に役に立つ。
- ❖ 無断での伊勢参宮が抜参り。→岡山藩の罰則は「追込」（＝押し込め）。
- ❖ 各地の名所図会（地誌・ガイドブック）や滑稽本『東海道中膝栗毛』などの出版→旅への憧れ増大。



図版２　「旅中雑記」の表紙
「天保十二年丑四月　旅中雑記　清虚庵」と記される。

1　小川真澄について

- 粒浦の小川家出身。寛政８年（1796）生まれ、嘉永７年（1854）年６月 24 日没（享年 59 歳）。
- 真澄の娘・嵯峨は犬養毅の母。ただし犬養毅は真澄の没後に誕生。

- 名は真澄、雅号は直常、号は清虚庵、幽石など。通称は嘉利七（文化 14 年〈1817〉22 歳まで）、利太郎。本講座では「真澄」に統一。
- 粒浦（岡山藩領）の名主。在職期間：文政 2 年（1819）24 歳～天保 12 年（1841）閏正月 46 歳（20 年以上）。
- 歌人として有名。父・栄貞、3 歳年下の弟・貞吾（雅藻）も歌人。備中国浅口郡長尾村（現倉敷市玉島長尾）出身の木下幸文、京都の香川景樹らに師事。
- 和歌だけでなく、茶道や笛も嗜む。
- 墓碑に「風流多技能嗜酒愛客客常満堂又善点茶儀極其蘊奥」（風流多技であり、よく酒を嗜み、客を愛し、客は常に部屋に満ちる。また、よく茶を点て、その奥義を極める）。

＊真澄の通称「嘉利七」・名主在職期間は「切支丹宗門御改判形帳」（岡山県立記録資料館所蔵児島郡粒浦村小川家宗門改関係資料 No.55・57・79）より判明。

2　天保 12 年「草まくらにき」について

- 大きさは、縦 20 センチ、横 13.3 センチくらい、全 29 丁。最後の 6 丁半は白紙。書き直しが複数個所あるため、旅に携行して書き込んだものと思われる。＊「旅中雑記」は「草まくらにき」より少し小さい。
- 4 月 27 日～6 月 19 日の旅の日記。その日の出来事や和歌を書く。
- 脚の治療のための湯治の旅。真澄 46 歳。
- 2023 年 8 月 1 日、整備室職員・山下洋さんの紹介によって閲覧。→4 丁裏に「森垣阿登李」の文字（**右写真**）。研究対象の人物。

  - ✓ 「森垣阿登李」…播磨国神西郡森垣村（現兵庫県朝来市生野町）の石川長英。
  - ✓ 森垣村は播磨国の北端で、すぐ北側は但馬国生野銀山。**【地図 4】**
  - ✓ 石川家の屋号は龍野屋。山師や幕府代官・旗本などを相手とする金融業を展開した豪農商、大地主。天保 9 年（1838）幕府巡見使の本陣となる。
  - ✓ 石川長英は、俳諧や雀を描く人物として有名。俳号「阿登里」、画号「雀翁」。文化 10 年（1813）「万家人名録」第三編に「あとり」として俳諧と肖像画掲載。**【図版 3・4】**
  - ✓ 天保 12 年時点で長英は他界（天保 8 年〈1837〉6 月病死。享年 71 歳）。→真澄は長英の死を知らなかったのでは？
- 旅を好機として俳諧人・画家として有名な石川長英との初対面を試みようとした。真澄の行動力に注目→城崎および往路・復路での人びととの交流がよくわかる史料。

3　旅の行程

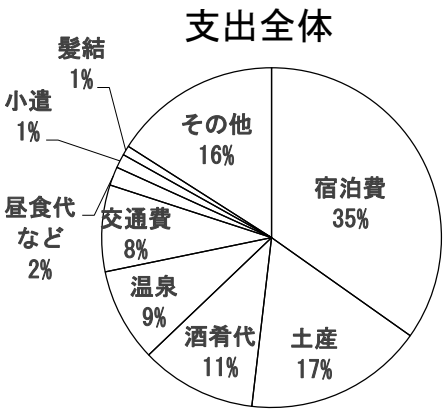
- 日数：50 泊 51 日（4 月 27 日～6 月 19 日）**【地図 1・2】**
- 主に海路、但馬街道を行く。駕籠、屋形付きの貸し切り船も利用。

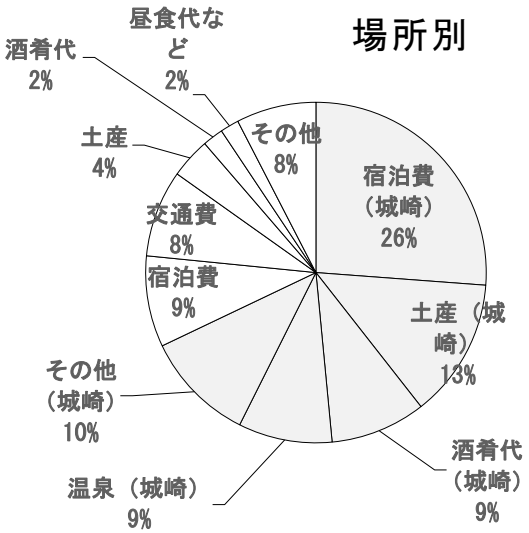
表　宿泊日数と移動手段

	期間	宿泊日数	移動手段
往　　路	4 月 27 日～5 月 8 日	10 泊 11 日	①川船・海船＝粒浦～飾万津（4 月 27 日～5 月 3 日、5 泊 6 日） ②陸路＝飾万津～豊岡（5 月 3～8 日、5 泊 6 日） ＊駕籠と徒歩、人足を雇う。 ③川船＝豊岡→城崎（5 月 8 日）。
城崎滞在	5 月 8 日～6 月 8 日	29 泊 30 日	油筒屋（ゆとうや）に逗留。
復　　路	6 月 8 日～6 月 19 日	11 泊 12 日	①川船＝城崎～豊岡（6 月 8 日） ②陸路＝豊岡～飾万津（6 月 8～18 日、10 泊 11 日） ＊駕籠と徒歩、人足を雇う。 ③海船・川船＝飾万津～粒浦（6 月 18～19 日、1 泊 2 日） ＊往路は 6 日もかかったが、帰りはスムーズ。

4　旅の支出

- 【下の円グラフ】天保 12 年（1841）4 月「旅中雑記」（レジュメ 1 頁参照）から作成。
- 江戸時代の三貨制度を反映して、金・銀・銭を使用。銀札も使用。銭の使用が一番多い。
- 総額を金に換算すると約 11 両。例）天保の頃、九州肥前（熊本）の人びとが上方参詣の費用が金 5～10 両。
- 宿泊費が一番多い。城崎での支出が 3 分の 2 を占める。
- 城崎での土産物：行李、麦わら細工、桑細工など。
- 姫路での土産物：革製品（革文庫、革文袋）。





5　真澄の足跡をたどる

- 城崎や往路・復路の在住で、俳人・歌人らと交流。初対面の人物とも交流。例）和田山の安積天鳳（俳人）、大薮の大島松翁（俳人）、竹田諏訪神社の宮本池臣（桂園派歌人＝同門、初対面）など。
- 憂いのない楽しい旅。感受性豊かな46歳の真澄。

①　大薮（現兵庫県養父市大薮）

(1) 日記の記述

- 往路、復路ともに大島松翁宅（後述）に立ち寄る。往路1泊、復路2泊滞在。
- 往路5月6日、復路6月8～10日。いずれも宿代の記入はない。大島家に宿泊か。真澄と大島松翁が知り合った経緯は不明。
- 5月6日条（往路）

> いとねもころにものして酒さかな調しいて丶、家の子らつとひて日暮るまて汲かハしぬ、訪ひし時よめる
> のとかなる松の下かけたつね来て雨をよきたるけふの喜しさ
> 庭上に老松ありとて翁大によろこひける、何くれ歌俳道のこと丶もかたらひてふしぬ、夕つかた（よさり）より雨ヤミぬ

《大意》たいへん心を込めて出迎えてくださる。酒肴を供してくださって、家の子供たちも集まって、日がくれるまで酒を酌み交わした。訪問したときに詠んだ歌。
「のとかなる松の下かけたつね来て雨をよきたるけふの喜しさ」
庭に老松があり、松翁は大変自慢に思っている。和歌や俳諧の道についてたくさんのことを語らって眠る。夕方に雨が止んだ。

- 6月8日条（復路）

> 夕つかた大薮松翁ぬしをとふ、よさり
> 老松の千世の風ふく宿なれハ世にもしられすす丶しかりけり

《大意》夕方に松翁宅を訪問。夜になる頃詠んだ歌。
「老松の千世の風ふく宿なれは世にもしられすす丶しかりけり」

- 6月9日条（復路）＊新暦7月初旬
  - ✓ 3頁以上にわたる夕涼みの記述。真澄の感激が伝わってくる詳細な内容(原文割愛)。
  - ✓ 一緒に行ったのは真澄を含め少なくとも6人。松翁、森島淡水・同佐左衛門(後述)、森島徳栄、養父村の児島郁五郎。＊供の者については触れられていない。

《大意》夕涼みのため、円山川を渡り柳原という河原を通って養父明神へ行く。芭蕉の「花見にとさす舟おそし柳原」の句碑がある。お宮（養父明神＝現養父神社）に参詣する。大変神々しい。それから水谷山普賢寺へ行く。橋があり「花月橋」と名付けた。谷の景色は素晴らしく、京都東福寺の通天橋の面影がある。堂の前に筵を敷いて涼む。河原が見渡せて景色はたとえようもない。川の中州に放牧している牛

や、早苗の植えられた水面に田舎家の灯し火が映る様子など、一つとして楽しくないものはない。**【図版 5】**

「吹わたる川風よりも涼しきは瀬を越浪の夕暮の声」

酒や肴を出して皆で酌み交わし、酔って歌い出す。

「月花のみなしは今よいかけたれと山風わたる橋のすゝしさ」

今夜は曇って月が見えないため、皆残念がる。森島徳栄は漢詩を、松翁は俳諧 2 句を披露する。森島佐左衛門と児島郁五郎は笛を吹いた。

「河瀬を浪にきほひて笛竹の水さやかにも聞えける哉」

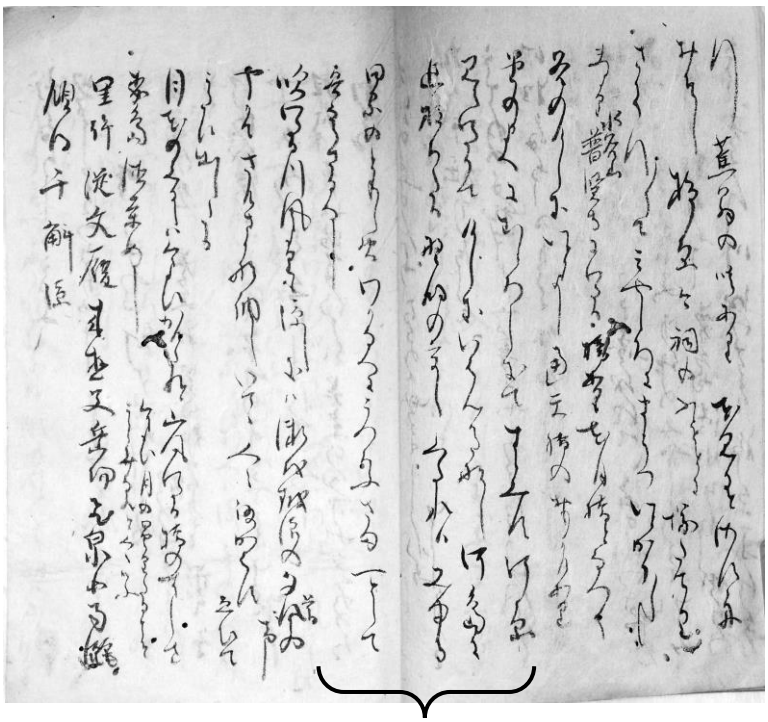
酌み交わして酔いしれて帰った。

「蛙鳴声を踏すに帰かな養父の田中の夕くれの道」

(2) 2024 年 11 月 12 日大薮と養父神社訪問

- 大薮は街道から離れてわざわざ立ち寄る必要がある場所であることを確認。**【地図 3】**
- たまたま出会った大薮の方々に親切にしていただく。出会いの連鎖。
- 大島松翁について。
  - ✓ 安永 4 年（1775）生まれ、弘化 3 年（1846）没。京都で客死。享年 72 歳。名は貞利。通称は幸兵衛・万兵衛。
  - ✓ 大島家は慶長年間（1596～1615）から小出家に仕えた武家。寛文 6 年（1666）に養父郡内に分家が創設され、大島家は家臣として付き従う。大塚村（現養父市）にあった陣屋が火事のため焼失、元禄 15 年（1702）大薮村に移転（幕末まで存続）。
  - ✓ 大島貞利（松翁）は年寄格の国詰用人。用人格から年寄格へ昇進、知行 75 石。
  - ✓ 天保 9 年（1838）倅・貞謙に家督を譲り隠居。天保 12 年（1841）時点、67 歳。倅・貞謙 36 歳。
  - ✓ 大薮の泉光寺に墓石、句碑がある。墓碑「吏務精詳頗有勤労性好山水又能諧歌」。
  - ✓ 真澄が日記に記した養父神社の芭蕉句碑「花見にとさす舟おそし柳原」（天保 2 年〈1831〉建立）には松翁（鳳兮）とその父・至峰（貞亮）の句も刻まれている。
  - ✓ 松翁の妻・綱も俳人。俳号は楓露（ふうろ）。明治 4 年（1871）東京で没（91 歳）。
  - ✓ 大島家は俳諧を楽しむ一家。
- 森島家について（森島淡水、佐左衛門、徳栄）。
  - ✓ 小出氏の家臣。国詰用人。大島家を補佐する立場。
  - ✓ 泉光寺にお墓がある。「森島淡水墓」。
- 身分（武士、百姓）を超えた交流。和歌や俳諧など文芸を通したもの。
- 現地を訪問し地元の方々と知り合えたことで、真澄の旅を楽しく追体験。

【図版5】



河原

見へワたりて　けしき　いはん　かたなし　河島　に

追放　ちたる　野飼　のうし　くたれハ　みゆる

丑家の　ともし　火　ワかなへにうつろふさま一として

興ならさるなし

② 生野銀山（現兵庫県朝来市生野町）

(1) 日記の記述

- 生野滞在は 6 月 14～16 日（復路）。14 日に姫路屋治介に宿泊しようとするが都合が悪く、別の宿（升屋半助）に泊まる。
- 翌 15 日、姫路屋治介の案内で銀山の見学。

ひめちヤあるしあなひにて銀山のかねほる所見んとてあしたより行、此生野てふ所山中にして口・中・おくと三所に家居ありていと広らか也、銀山の近ワたりハ山水のけしきあしからす、不動か滝とていと白きいはほより水落たきりてえもいはれす、此かたはらに銀ほる穴よりかよふ水落めり、しはしいこひつゝ行、（中略）大亀山といへるに行て見るに、ほり入行さゝゐ（栄螺）の貝に灯ともして行、小童ハ脊にちいさきワらの袋めくもの脊おひて、是にうかちし石を入てはこふめり、いつれも手をつきてはひつゝ行也、穴の口にハ小屋ありて、事を司とる人あり、穴口あまたあるよし也、
白かねの宝の山をほりて行(入)あなおそろしの人のなりはひ

《**大意**》姫路屋治介の案内で銀山の採掘現場の見学に朝から行く。生野という場所は山間部で、口・中・奥の 3 つの地域に家があり大変広い。銀山近くの山水の景色は悪くない。不動が滝という滝があり、真っ白な岩から水が落ちていて何とも言えないほど素晴らしい。銀を掘る穴から水が落ちている。しばし休みながら行く。（中略）大亀山へ行く。栄螺に火を灯して穴に入っている。子どもは小さい藁袋のような物を背負い、それに掘り出した石を入れて運んでいる。皆、手をついて這っている。穴の入口には小屋があり、監督する人がいる。穴はたくさんあるということである。

「白かねの宝の山をほりて行(入)あなおそろしの人のなりはひ」

＊姫路屋治介…城崎の三木屋出身。信心深い祖父が筑紫太宰府の梅の種を植えて育てた枝で木剣を作った。その木剣についての歌を詠んでほしいと頼まれる（以上「草まくらにき」より）。天保 9 年（1838）幕府巡見使の接待に参加。

＊大亀山…山師漆垣太郎兵衛が発見。文政 10 年（1827）御所務山（最高位の鉱山）、天保元年（1830）御見石（銀石）を出す。天保 9 年（1838）幕府巡見使が大亀山を見分。

- 天保 9 年（1838）、京都からの帰り城崎経由で帰国する際、生野銀山の近くを通る。「遊筇日記」閏 4 月 5 日条の記事（倉敷市歴史資料整備室所蔵小川家文書 3-10）。→3 年前から興味があった。

生野銀山のこと里人ニつふさにきくに、銀の石ほる人土中ニいること故大かた短命にして三十にはみちすして皆死せりとか、しかれとも日々暫時のほと其業して、余ハはたらかす、食物なとハこよなふ美食す、よて皆短命をいとはす、中々に好て石ほる人多しといへるをきゝて（中略）生野川のあたりにハ魚すますよし

《大意》生野銀山について里人に尋ねると、「銀山の石を掘る人は土の中にいるため、多くの人が短命で、30 歳に手が届かないうちに亡くなってしまう。ところが、しばらく働いては休み、とても美味しいものを食べるため、短命であることを嫌がらず、好んで石を掘る人が多い」という。(中略) 生野川の辺りには魚は住まないという。

(2) 2024 年 12 月 25 日生野銀山見学【地図 4】

- 生野銀山は室町時代から本格的な採掘が始まり、江戸時代は幕府の直轄地。明治元年（1868）政府直轄の官営鉱山→明治 22 年（1889）宮内省御料局→明治 29 年（1896）に三菱合資会社に払い下げ。昭和 48 年（1973）閉山。翌年観光施設として「史跡生野銀山」開業。
- 坑道外コース、鉱山資料館、坑道内コースを見学。
- 大亀山は坑道外コースにある。
- 鉱山資料館で大亀山に関する「見石飾幕」(山車の幕)、天保 14 年（1843）・嘉永 2 年（1849）の絵図など展示を見学。
- 坑道内コースで、栄螺の灯り・江戸時代の採掘の様子などを見学。

おわりに

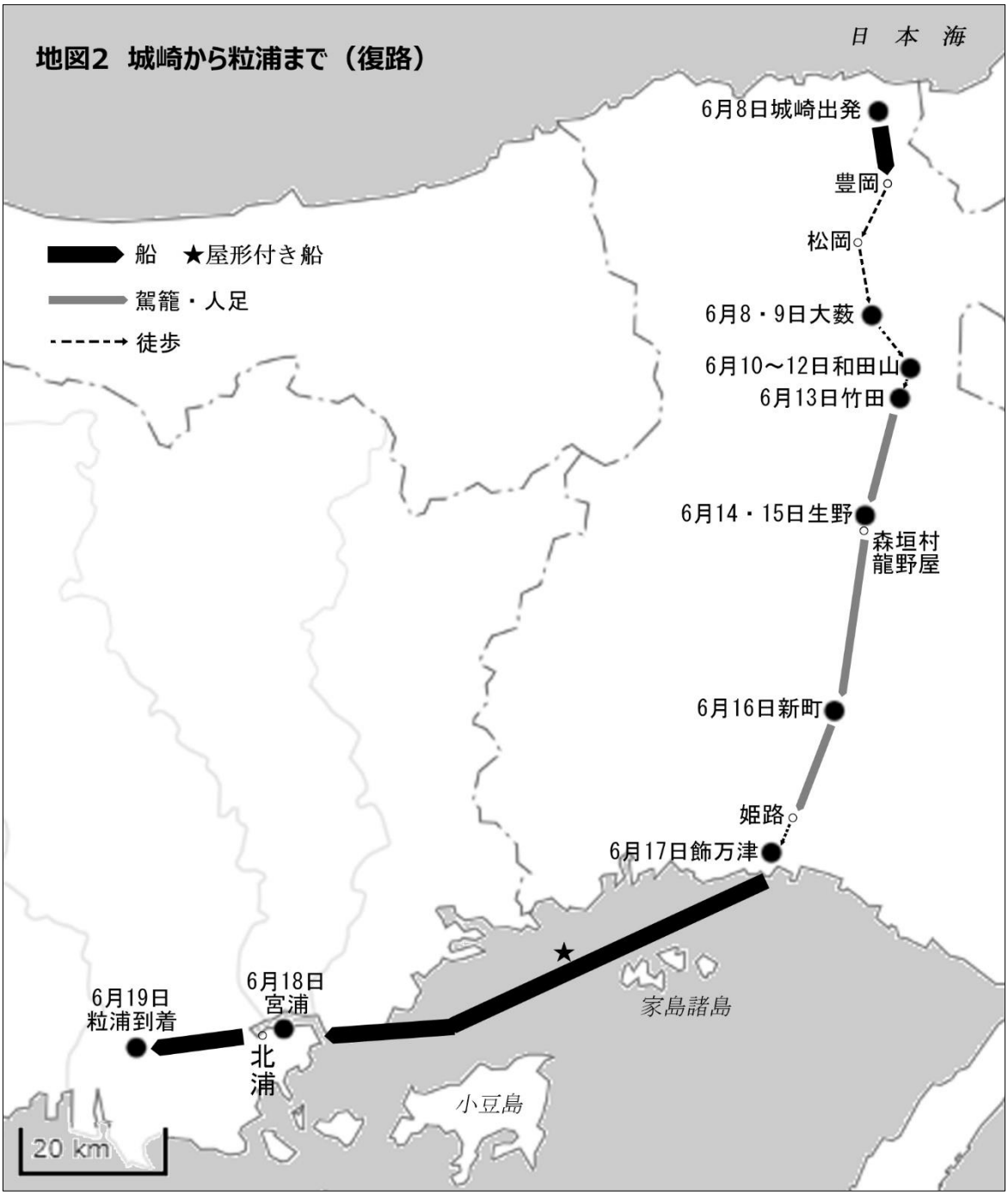
- 小川真澄の旅は、乗り物（船、駕籠）を使った移動。城崎温泉に 1 ヶ月滞在の贅沢なもの。脚の治療を理由とした、名主退役の慰安旅行だったか。
- 旅先での人々との交流の方法は、自分の得意分野を活かしたもの。武士や神主、商人らと交流。特に身分を超えた武士との交流は注目される。
- 積極的な交流は、真澄の性格に関係か。墓碑の「愛客客常満堂」。
- 旅先での交流が、粒浦など国元にどのように作用したかが次の課題。

〈参考文献〉

太田虎一著・柏村儀作校補『生野史　2　校補政治編』生野町役場、1964 年（1977 年復刻）
新城常三『庶民と旅の歴史』日本放送出版協会、1971 年
永山卯三郎『倉敷市史』第 8 冊、名著出版、1973 年
兼清正徳『桂園派歌壇の形成』桜楓社、1985 年
『岡山県大百科事典』上巻、山陽新聞社、1985 年
『養父町史』第 1 巻、養父町、1990 年
『岡山県歴史人名事典』山陽新聞社、1994 年
『ビジュアル・ワイド　江戸時代館』小学館、2002 年
『新修倉敷市史』第 4 巻近世（下）、2003 年
柴田純『江戸のパスポート；旅の不安はどう解消されたか』吉川弘文館、2016 年
室山京子「近世後期金銭貸借訴訟をめぐる旗本屋形池田家と領外商人;播磨国神西郡森垣村龍野屋伊兵衛長英の活動を中心に」『神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報 LINK：地域・大学・文化』2021 年
岸吉堯・岸（瀧）冨美子編集『大薮　泉光寺』2024 年
「史跡生野銀山」(https://www.ikuno-ginzan.co.jp/index.php、2025 年 1 月 30 日閲覧)

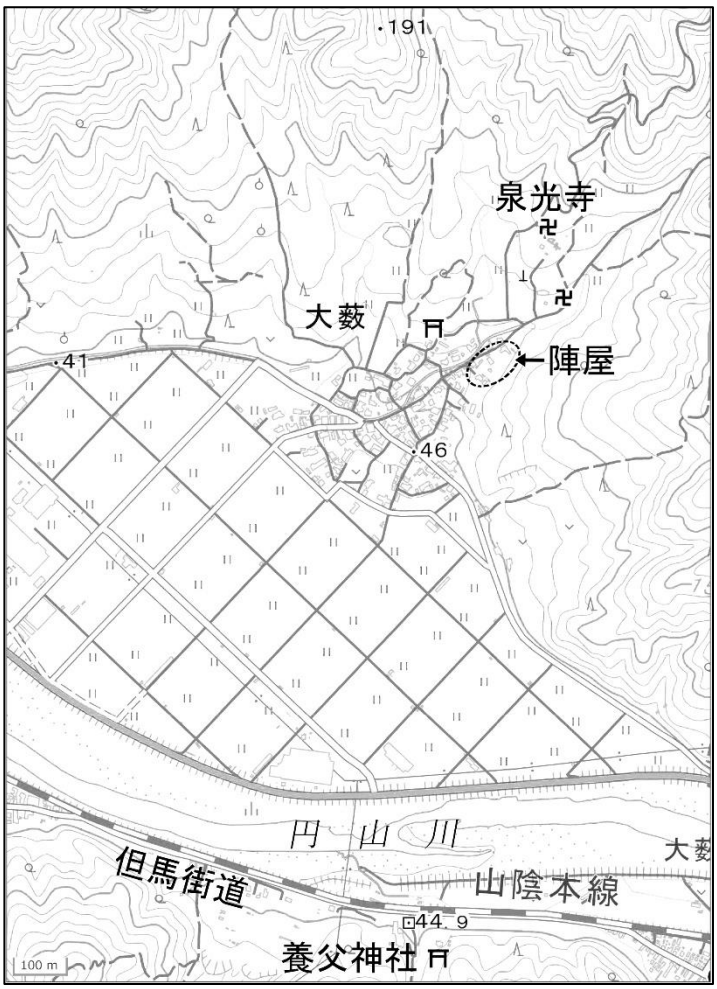
地図1

（ベースマップは地理院地図の白地図）

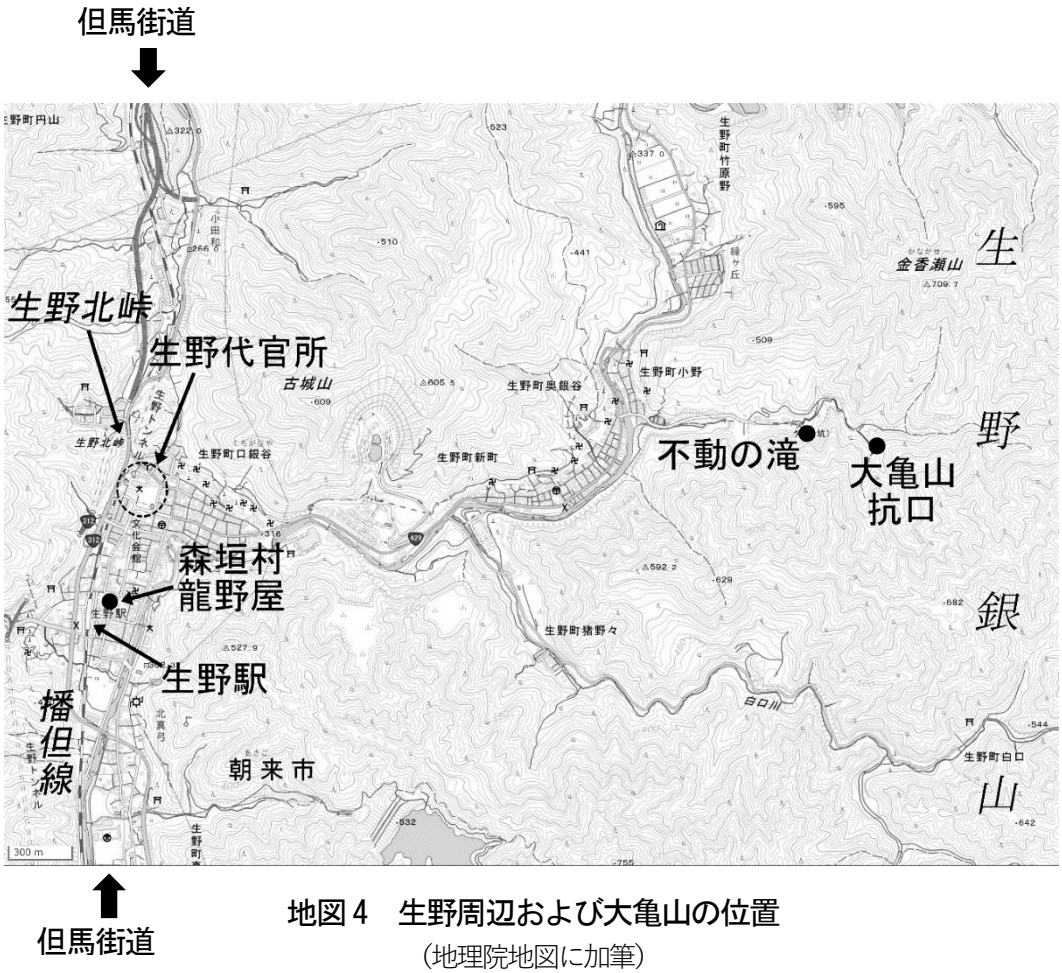


地図2

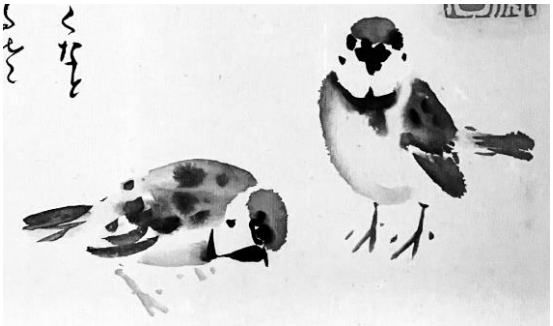
（ベースマップは地理院地図の白地図）



地図３　大薮の位置
（地理院地図に加筆）



地図４　生野周辺および大亀山の位置
（地理院地図に加筆）



図版３　石川長英が描いた雀
（兵庫県朝来市生野町生野書院管理）

図版４　「万家人名録」に掲載された石川長英
（©The Trustees of the British Museum. Shared under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International (CC BY-NC-SA 4.0) licence.）